

身延山と東アジア仏教の至宝

木村中一
(身延山大学)

국문요약

미노부산에는 일연종 총본산인 미노부산 구온지(久遠寺)가 있고, 옛부터 조산(祖山)이라고 일컬어져 일연 신봉자의 신앙을 모으는 영지로서, 그 존재는 흔들림 없다.

이 미노부산 구온지 관할 아래 있는 것이 미노부문고(身延文庫)로서, 그 문고 안에는 수 많은 불전·외전·그 외 집기 등이 소장되어 있다. 이들은 일연종 종학자뿐 아니라 많은 동아시아 연구자에게 널리 이용되고 있다. 소장물 등에 대해서는 『미노부문고 소장 문서·회화 목록』이나 『미노부문고 전적 목록』 전

불교학리뷰 (Critical Review for Buddhist Studies)

22권 (2017. 12) 259p~280p

www.kci.go.kr

3권 등으로, 주로 전적류에 대해 소개되어 있다. 그러나 그들에게는 서지정보가 기재되어 있을 뿐으로서, 새로 발견된 문헌이 조금 공개되어 있다 해도 극히 일부에 그치고 있다. 따라서 조사대상이 되는 개별 전적에 대해 상세히 알기 위해서는 실제로 미노부산에 가서 확인할 수 밖에 없는 것이 현 상황이다.

이번 강연에서는 ‘미노부산과 동아시아불교의 보물’이라는 제목으로, 먼저 일연종 종조인 일연의 생애에 대해 서술한다. 이것은 나중에 서술할 ‘미노부문고의 연혁’ 중 최초기에 관한 사항이므로 간단하게나마 언급한다. 다음으로 미노부문고의 전적 수집 이념과 관련하여 일연이 행한 전적 수집 양상과 그 목적에 대해 서술한다. 그 후 미노부 문고의 역사와 전적 수집 상황에 대해, 그 기간을 6기로 나누어 각 기간의 전적 수집 상황에 대해 고찰한다. 이어서 현대에 미노부문고 내 전적 조사와 그 성과로 들 수 있는 『미노부문고전적목록』의 작성에 대해 서술하고, 마지막으로 미노부문고 외에 소장되어 있는 미노부문고에 대해, 그 소장 상황과 그 외의 귀중한 전적에 대해 서술한다.

본고는 상기한 내용의 고찰에 의해, 이후 동아시아불교 연구의 발전과 나아가 새로운 발견의 가능성을 기대하는 것이다.

주제어: 미노부산(身延山), 구온지(久遠寺), 일연종(日蓮宗), 미노부문고(身延文庫), 동아시아불교

1. はじめに

身延山には、日蓮宗総本山である身延山久遠寺があり、古来より「祖山」と称され、日蓮信奉者の信仰を集める「霊地」として、その存在は揺るぎないものである。

この身延山久遠寺の管轄下にあるのが「身延文庫」である。文庫内には現在仏典・外典・その他什物などが数多く所蔵されており、これらは日蓮宗宗学者のみならず東アジア研究者の多くに広く用いられているところである。所蔵物などについては『身延文庫所蔵文書・絵画目録』や『身延文庫典籍目録』全三巻などで主に典籍類について紹介されているが、それらには書誌情報が記載されるのみとなっている。つまり、新発見など少しく公開されている文献もあるが、それらは至極一部にとどまり、調査対象とする個々の典籍類の詳細を知るためには実際に身延山に赴き、確認する他ないのが現状である。

このような現状をうけ、身延山大学国際日蓮学研究所（前・東洋文化研究所）では、平成二十二年度より現在に至るまで身延文庫所蔵典籍を対外公開すべく影印として『身延山資料叢書』を発行している。

今回「身延山と東アジア仏教の至宝」と題し、身延山にある身延文庫の歴史とその所蔵典籍、さらに文庫外に所蔵される貴重仏典籍などについて少しく紹介したい。これにより今後の東アジア仏教研究の発展、さらなる新発見の可能性を期待するものである。

2. 日蓮の生涯

本題を述べる上で、記さねばならないのが日蓮の生涯である。これは後

に記す「身延文庫の沿革」の最初期に関わる事項であり、それ故に簡単ではあるがそれをたどってみたい。

日蓮は承応元年（1222）安房国（現在の千葉県鴨川市）に生まれた。12歳で当地の名刹である清澄寺（当時天台宗）に登り初等教育を受けた後、16歳で「仏教の深奥を知りたい」という主知的・学問的欲求、また人間の生死問題に対する答えを求めて出家する。天台僧として出家した日蓮（出家時は是聖房蓮長という）は幕府が開かれ、政治の中心地であった鎌倉（現在の神奈川県鎌倉市）、次いで文化・日本仏教の中心地である京畿地方、そして仏教研鑽の最高学府であった比叡山にて遊学するのである。

日蓮には出家の師（道善房）はいたが、その学問欲求を満たしてくれる（導いてくれる）師匠と出会うことはなかった。それ故にその学問研鑽方法は主に「経・論・疏の閲読」を中心としたものであったという。これを通じて日蓮が痛感したのは「諸宗乱立の時代において、中心となるべき教宗が不在している。釈尊の真意はいずれにあるのか」という疑問であり、それを解明すべく更なる閲読に励むのであった。そして『涅槃経』の「依法不依人、依義不依語、依智不依識、依了義經不依不了義經」の文と、『無量義経』の「四十余年未顕真実」の文と出会い、釈尊の真意は『妙法蓮華経』にあると辿り着くのである。その後、日蓮は「諸宗立宗の祖師らは自らの意趣によって依經を選択しており、それは釈尊の真意に随順していない」と諸宗を批判し、併せて鎌倉幕府などの為政者に対しては「法華経信仰を捨て、浄土信仰や禅を信仰することにより、近年うち続く天変地異が発生するのだ」と強く諫めるのであった。これにより諸宗の高僧からは襲撃され、為政者からは2度にわたる流罪に処せられるのである。しかしこれらに屈することなく、日蓮は生涯にわたり人々に法華経受持の勧奨を行い続けたのであった。だが結局のところ、鎌倉幕府にはその主張が受け

入れられることは生涯なく、鎌倉を去り日本中を回って法華経信仰を説こうとするのである。そこに檀越^{だんのつ}（信者）の南部実長^{なんぶ さねなが}より「自らが治める地へとお越しになってはいかがか」という誘いがあり、それを受けるかたちで当地に赴くのであった。この地こそが身延山（現在の山梨県南巨摩郡身延）であり、当初は長居する予定ではなかったが、日蓮はこの身延山を大変好み「身延不出山の誓」を立てて、入山以後の日蓮晩年9ヶ年間、弘安5年（1282）に病重く湯治の旅に離山を余儀なくされるまで、この誓いは破られることはなかった。

日蓮は湯治の途次、病悪化し目的地へと行き着くこと無く、10月13日に檀越^{いけがみむねなが}である池上宗仲の邸宅（現在の東京都大田区）にて寂するが、その直前に「たとえどこで死ぬようなことがあっても墓は身延山にたててほしい」と先の南部氏に墓所建立の遺命をする。これを受け、弟子檀越は身延に廟所を建立し、これより身延山は「日蓮^{せいしん}棲神の地」とされ、現在の日蓮宗の中心地となっていくのであった。

3. 身延文庫の典籍蒐集理念

さて、ここに本題である「身延山に眠る東アジア仏教の至宝」身延文庫について、まずその典籍蒐集理念について考察したい。

身延文庫の草創は日蓮身延在山中の文永12年（1275）までにさかのぼることができるとされる。先にも述べたが、日蓮は度重なる法難を経て、三度の国諫を行ったが全く聞き入れられる事無く、「三度国をいさむるに用ずば、山林にまじわれということは、定るれい（例）なり」¹⁾と、鎌倉を

1) 「報恩抄」定遺1239

離れ、文永11年（1274）5月に身延山に入山した。この翌年3月に自らの檀越であった曾谷教信・大田乗明に宛てた書状²⁾には、

令弘通此大法之法、必安置一代之聖教、習学八宗之章疏。然則予所持之聖教多々有之。雖然、兩度御勘氣、衆度大難之時、或一卷二卷散失、或一字二字脱落、或魚魯謬誤、或一部二部損朽。若默止、過一期之後、弟子等定謬乱出来之基也。爰以、愚身老耄已前欲亂調之。³⁾

と記されており、「この大法（『妙法蓮華經』）を弘めるためには、かならず釈尊の一代聖教を傍らに備え置いて、八宗の書物を習学しなければならない。故に自らは多くの聖教を所持していたが、伊豆と佐渡の二度にわたる流罪やその他の種々の法難によって、その中の一巻、二巻が散失したり、一字二字が脱け落ちたり、文字の写し誤りの書物があったり、一部二部と破損してしまった。もしこのまま放置して一生を過ごしてしまうならば、その後の弟子たちに誤りを生じ、混乱をきたしてしまうことの原因となるのであるから、自らが老いてしまう前にこれを調べ糺しておかねばならない」と述べている。ここにあるように日蓮は、身延山において様々經典類の修補訂正と蒐集を進めていったようである。この日蓮の行動は、諸宗の高僧らとの法論・対論の用意と教線の拡大、さらに門弟教育を目的としたものであったようで、これが身延文庫における典籍類蒐集の理念となっており、以後700年にわたる身延文庫発展の礎となっていくのであった。では次に身延文庫の歴史を紐解きながら各期間にわたる身延文庫の典籍蒐集格護の様子を考察したい。

2) 日蓮の書いたものを日蓮系諸教団では古来より「遺文」・「御書」、または「聖教」「妙判」などと称する。その内容は「著述」・「書状」・「要文」・「図録」・「写本」などと大分することができる。

3) 「曾谷入道殿許御書」定遺910

4. 身延文庫の歴史と典籍蒐集

身延文庫の歴史は、その内容に基づき6期に分類される。その期間は、

第1期 文永11年～弘安5年（1274～1282、日蓮在山時代）

第2期 弘安5年～寛正3年

（1282～1462、日蓮滅後～身延山第11世行学院日朝入山までの時代）

第3期 寛正3年～弘治2年

（1462～1556、日朝入山～第14世善学院日鏡までの時代）

第4期 弘治2年～万治2年

（1556～1659、第15世宝蔵院日叙～第27世通心院日境までの時代）

第5期 万治2年～明治7年

（1659～1874、第28世妙心院日奠～第72世獅音院日健までの時代）

第6期 明治7年～昭和51年（1874～1976）

である。この区分は身延山史を基として、^{むろずみいちろう}室住一妙氏が『身延文庫略沿革』や『身延文庫所蔵文書・絵画目録』の「解説」等において提示したものであり、本論ではこれを基として若干の修正を加え、その時代区分や蒐集内容について考察する。

・身延文庫第1期

さて、第1期は先に挙げた日蓮身延在山期であり、日蓮晩年9ヶ年（1274～1282）に位置する。先の『身延文庫略沿革』などによると、この時代の蔵書は主に日蓮所持本や、日蓮の命をうけた弟子檀越らが蒐集し

たものであるといい、この期間の文庫蔵書内容は所謂「釈尊一代の聖教乃至八宗の章疏」であったとされる。4)これらは日本仏教のみならず仏教全般の經典釈疏史籍類の主要典籍であり、日蓮前半生分の所持本は日蓮宗大本山・正中山法華経寺（千葉縣市川市）に所蔵されるが5)後半生にて所持された典籍はここ身延山に所蔵された。しかし庫蔵については特に記録などが存在せず、おそらくこの第1期には庫蔵は未だ存在せず、これらは草庵6)の棚に収蔵されていたであろうとされる。

・身延文庫第2期

次いで第2期になると、高弟らによる「日蓮遺文」の写本類や注釈書類が収蔵されるようになる。またこの期間の学僧らは向学意欲が盛んで諸方への遊学が活発であり（この学僧らの遊学地の主たるものは比叡山や天台系寺院であったため）、これが起因となり天台系講義録をはじめとする中古天台学書やその口伝書、秘書までもが多く収蔵されるようになった。当然のことながら天台法華教学を根幹とする日蓮教学を理解するためには、天台教学を学ばなければならないため、これらは学僧らの必須典籍であったであろう。故に当時の収蔵典籍は「台家の講録就中古天台の秘書口傳ものが大半を超え」7)たわけであり、ここに当時の日蓮教学と天台教学との密接な関係を見ることができるのである。

4) 室住一妙1941『身延文庫略沿革』：p6

5) 室住一妙氏は『身延文庫略沿革』の中で、天台系学書を90巻余り確認できているが、現在では100点を超えるとされる。

6) この草庵は日蓮自らが「身延山妙法華院久遠寺」と名付けており、現在の身延山久遠寺の淵源である。

7) 室住一妙1941『身延文庫略沿革』：p14

・身延文庫第3期

第3期をみると、この期間は身延山第11世行学院日朝ぎょうがくいんにちちょうの功績が挙げられる。日朝は身延山西谷にしだに⁸⁾にあり手狭となった久遠寺を現在の地へと移転し、身延山内の諸法度や年中行事の制定、さらに寺院末寺の奉仕制度を定めるなど、久遠寺経営の組織化・拡大発展に貢献した中興ちゆうこうの師である。また同時に当時の日蓮宗を代表とする学僧でもあり、天台教学研究の最先端を行った仙波檀林せんぱだんりんにて中古天台の奥義を究めるとともに、真言・法相等の八宗兼学を修して、その名をとどろかせたといわれる。日朝は天台教学書の書写を中心に、日蓮遺文の書写・注釈、目録の制定などを積極的に行い日蓮教学の振興をはかり、身延文庫の蔵書拡充発展に寄与した。この期間は日朝や、その弟子らが中心となり蔵書を飛躍的に増加させた。それは日朝らが記した目録よりも明らかである。日朝や身延山第14世善学院日鏡ぜんがくいんにちきょうらは『蔵書目録』の他に『章疏目録』を作成し、日蓮教学を修学するために必要であろうと思われる書名を挙げ、日蓮教学研鑽の一助としたようである。⁹⁾ここに記載される典籍類全てが身延文庫に所蔵されているわけではないが、その多くが当時の身延文庫には所蔵されていたのではないかと推察される。

・身延文庫第4期

第4期は身延山第21世寂照院日乾じやくしやういんにちけん・同22世心性院日遠しんしやういんにちおん、そして第26世智見院日暹ちけんいんにっせんをはじめとする当時の日蓮教団を興隆させた高僧らが活躍した

8) 身延山は3区画に分かれており、現在の久遠寺に向かい左側を「西谷」、右側を「東谷」、そして中央を「中谷」と称する。

9) この点については論者が共編した『身延山資料叢書』第3・4巻に少しく記した。また同書において海東仏教関係典籍についての解説は金天鶴氏が詳細に記しており、あわせて参照してほしい。

時代である。特に日遠は当時の日蓮系諸檀林の教学に大きな影響を与えた人物であり、冠賢一氏はその著書『近世日蓮宗出版史研究』において、日遠関係の「日蓮系天台学書」が1641年から1670年の間に42点も刊行されたと述べている。¹⁰⁾当時の日蓮系諸檀林の教学は天台教学が中心であり、その一端を記せば、

【所化の学級】¹¹⁾

	(級名)	(教授)								
下四部	一、名目部	五老								
	二、四教義部	四老								
	三、集解部	三老								
	四、観心部	二老								
大部	五、玄義部	玄講主								
	六、中座 (文句部)	<table style="border: none; margin-left: 20px;"> <tr><td>—</td><td>中頭</td></tr> <tr><td>—</td><td>二ノ側</td></tr> <tr><td>—</td><td>三ノ側</td></tr> <tr><td>—</td><td>四ノ側</td></tr> </table>	—	中頭	—	二ノ側	—	三ノ側	—	四ノ側
—	中頭									
—	二ノ側									
—	三ノ側									
—	四ノ側									
	七、止観部									

【旧檀林の教科書】¹²⁾

一、名目部・・・西谷名目

10) 冠賢一1983 『近世日蓮宗出版史研究』 : p14-16

11) 藤井教詮 1975 『飯高檀林史料 檀林録上』 : p2

12) 諸檀林並親師法録刊行会復刻 1962 『諸檀林並親師法録』 : p13

- 二、四教儀部・・・諦観四教儀（諦観録）
- 三、集解部・・・四教義集解（従義集解）、四教義集註（蒙潤集註）
- 四、観心部・・・金錐論、顕性録、十不二門、文心解
- 五、玄義部・・・玄義、积籤
- 六、文句部・・・文句、文句記（妙楽記）
- 七、止観部・・・摩訶止観、輔行
- 八、御書科・・・録内・録外、章疏 ← 諸宗同異研究

であった。日蓮系諸檀林ということで、そのカリキュラムは日蓮教学の根幹となる日蓮遺文が最初に学ばれると思われるが、実際には天台教学の修学が主であり、日蓮遺文の研鑽は「御書科」においてやっと学ぶことができる程度であった。¹³⁾そしてこのカリキュラムの参考書として日遠の「日蓮系天台学書」が使用されていたようで、現在も旧檀林の諸寺院において日遠由来の板本の多くをみることができる。この日乾・日遠の時代は蔵書のさらなる拡充と整備が図られており、『身延文庫略沿革』によると日遠の代で天台系学書以外に『菩薩戒本宗要私』、『菩薩戒義眼智抄』など律部の研究抄録が、さらに真言系学書、華嚴系学書、禅系学書、浄土系学書などが入庫したことが記されている。¹⁴⁾また第27世通心院日境^{つうしんいんにちきょう}には『出曜経』などをはじめとして、『俱舍論』、『四分律』、『三教指帰秘記』などの各宗章疏類も入庫しており、これらがこの時代の特筆すべき点として挙げられる。¹⁵⁾上記よりわかるようにこの第3期・第4期の約200年間は「身延文庫の最興隆時代」と現在位置づけられている。

13) この日蓮系諸檀林の修学については拙稿「近世日蓮教団の檀林における修学内容についての一考察」『印度學佛教學研究』65(2) p187-193参照

14) 室住一妙1941『身延文庫略沿革』: p32

15) 室住一妙1941『身延文庫略沿革』: p38

• 身延文庫第5期

さて次に第5期をみると、この時代は「文庫内の典籍修補・目録編成時代」といえる。また同時に身延文庫の諸制規が定められ、明暦2年（1656）ころには典籍類の散逸を防ぐため「身延文庫」という蔵書印が押され、諸記録に文庫名称が現れ始める時代でもある。この時代の特筆すべき人物として身延山第31世一圓院日脱^{いちえんいんにちだつ}を挙げることができる。日脱は久遠寺の諸堂宇の改修に着手し、靈宝蔵（御真骨堂^{ごしんこつどう}）と拝殿、東蔵の改築改修を行った。そして東西に分かれる身延文庫の「東西制規」を制定し、二尺余りの板に日脱自身が筆を執り各蔵内に掲げるのである。現在もこの制規は身延文庫内に掲げられており、その内容は、

東 蔵 定

- 一、相伝箱堅不可開見事
- 一、惣而書物出入之時貫首江可遂其断事
- 一、初為取出架江必如其卷之次第可重置事

右之条々此蔵江出入之人者致一覽堅可相守者也

天和辛酉元年極月八日

延山三十一世 日脱（花押）

西 蔵 定

- 一、此蔵江世流布板行之書不可入事
- 一、此蔵之書物東蔵江不可入事
- 一、惣而書籍出入之時節貫首江可遂其断事
- 一、惣而此蔵之書物不可致借用事
- 一、初為取出之箱江必可納置事

右之条々此蔵江出入之人者致一覽堅可相守者也

峯 延山三十一世 日脱（花押）

天和元年歳次辛酉極月八日¹⁶⁾

とある。これによれば当時の身延文庫東蔵には板本典籍類や厳封された箱が所蔵されており、西蔵には写本類や重要典籍が所蔵されていたようである。また制規には両蔵間での典籍の配置換えを禁止し、貫首の管理責任権を明示している。さらに西蔵は重要典籍類所蔵のためか、特に借用を禁止した文面を確認することができる。この制規の典籍格護理念はその後に身延山第33世^{おんでんいんにちこう}遠沾院日亨が更なる制規や「蔵書定書」^{ぞうしょさだめがき}などを制定するなどして受け継がれていった。

・身延文庫第6期

最後に第6期であるが、この時代は身延文庫の転換時代といえる。その契機は「身延山久遠寺 明治八年の大火」として語り継がれる事件である。明治8年（1875）1月10日午後6時に西谷本種坊が出火。その火の手は瞬く間に広がり、久遠寺本堂・祖師堂・祈祷堂・位牌堂・五重塔など計75棟、その他に山内支院や民家までが焼失し、さらにこの大火によって身延山の最重要霊宝である日蓮遺文数点や、明版一切経の一部などの典籍も灰燼に帰ってしまった。しかしこれを契機として残された典籍類の整備がこれ以降行われることとなり、その嚆矢として挙げられるのが島智良氏による身延文庫所蔵典籍の整備・修補作業、そして写本目録の作成である。島氏が作成した目録『身延文庫目録仮帳』はその後の「典籍目録」作成の底本のひとつと位置づけられ、以後大きな影響を与えることとなる。この事業はこの後に継承され、^{えりやまぎげん}江利山義顕氏は島氏の継続整備を行い新たな目録を作成。また室住一妙氏は未整理分の写本古文書などの調査、わけて写本板本類の書

16) 身延文庫所蔵「東西蔵制規」

誌台帳の作成を行った。江利山・室住両氏が作成した目録台帳は「江利山目録」、「室住目録」と称され、両目録によって身延文庫の概要把握が可能となった。さらに昭和48年(1973)から同51年(1976)まで山梨県教育委員会・立正大学・身延山短期大学(現・身延山大学)による身延文庫所蔵の古文書・絵画の緊急調査が行われ、その成果は昭和51年3月刊行の『身延山久遠寺身延文庫所蔵古文書・絵画目録』として公開されるのである。

以上、身延文庫の歴史を紐解きながら各期間にわたる身延文庫の歴史と典籍蒐集格護の様子を考察した。次に現在、身延文庫調査の基礎資料となる『身延文庫典籍目録』作成に関わる調査内容とその整理概要について少しく考察したい。

5. 「身延山久遠寺身延文庫典籍調査会」による調査と『身延文庫典籍目録』作成

昭和53年(1978)、身延文庫の典籍の調査と目録作成が久遠寺当局より要請され、それを受け発足したのが「身延山久遠寺身延文庫典籍調査会」(以下、調査会と略す)である。身延文庫所蔵典籍の内容は複雑であったため、調査会が示した調査対象はまず板本類を除いた典籍に絞られた。そして現行の書誌学に耐えうる目録作成のために、調査採録項目を詳細に取り決めたという。¹⁷⁾その調査カード記載事項は大きくは1点につき12事項、細目を含めれば35項目にも及ぶものであった。この調査は先の「室住目録」に基づき行われ、同日録が示す、

17) 冠賢—2003「身延文庫調査報告」『身延文庫典籍目録 上』参照

- ①「当山部」 ②「他山部」 ③「和漢・俱舎・経論」
 ④「経論・余宗」 ⑤「記録・法則」 ⑥「台疏・台見」
 ⑦「台見・台宗」

に分類され、その順に従い作業が開始された。しかし調査典籍とカードの記載項目が多く、膨大な年月が費やされてしまい、また調査会の中心人物が相次いで逝去したことより調査活動は中断してしまうのである。しかしそれまでの成果は原稿化されており、残すは未整理分のみとなっていた。

時に平成15年(2003)は「日蓮聖人立教開宗750年」にあたり、身延山当局はその慶讃事業として『身延文庫典籍目録』の公刊を切望したのであった。これを受け、限られた時間の中で、諸般の事情により従来の方針を縮小しまとめ上げたのが『身延文庫典籍目録』全三巻なのである。

『身延文庫典籍目録』上巻は当山・歴代部で、身延山第2世佐渡阿闍梨日向にこうから日朝関連の典籍が収録されており、分類番号はAを「著作」、Bを「筆者本」、Cを「所持本」示して分類されている。書誌情報は通番号・分類番号・書名・数量・著者・筆者・所持者・年記・丁数・分量・備考と示されている。次いで中巻は当山・歴代部と他山部の2部で構成される。まず当山・歴代部では第12世圓教院日意えんぎょういんにちいから第73世心妙院日修しんみょういんにっしゅう関連典籍、さらに他山部として身延・山之坊やまのぼう歴世れきせの日定にちじょうをはじめとして、身延山内諸坊歴世や諸由緒寺院、また日蓮系他宗の学僧を62人挙げ、それらの人物に関連する典籍を収録している。¹⁸⁾最後に下巻であるが、特に東アジア仏教研究者の注目を集めるのがこの巻である。下巻は諸宗部に該当し、分類は、

- ①外日(日本外典) ②外支(中国外典) ③俱舎 ④経論 ⑤余宗

18) この他山部に関しては出典を「江利山目録」によったという(『身延文庫典籍目録 中』「他山部」参照)。

- ⑥当山記録 ⑦記録法則 ⑧当聖(当宗聖教) ⑨当著(当宗著述)
 ⑩当論(当宗論義) ⑪当疏(当宗論疏) ⑫当朝(日朝關係)
 ⑬当雜(当宗雜部) ⑭台疏(天台論疏) ⑮台見(天台見聞)
 ⑯台宗(天台宗要) ⑰台口(天台口伝) ⑱台問(天台問要)
 ⑲台義(天台義科) ⑳台雜(天台雜部) ㉑天台(天台宗)
 ㉒盈(雜著) ㉓盈説(説教) ㉔写(写本) ㉕収(収集典籍)
 ㉖来(伝来典籍) ㉗祈祷 ㉘珍本(板本部) ㉙珍本(写本部)
 ㉚相伝 ㉛切紙口伝

の31部に分かれている。この『身延文庫典籍目録』の編者の1人である
 中尾 堯^{なかお たかし}氏は「『身延文庫典籍目録 下』の刊行にあたって」にて、

『身延文庫典籍目録 下』では、仏教書以外の典籍、いわゆる「外典」の書名
 目録をまず収める。ついで日蓮宗の枠を越えて広く蒐集書写された、法華経を
 はじめとする諸宗の経論・章疏類・見聞類の書名を、広範囲にわたって収録す
 る。特に、中世後半から近世にかけて書写された、天台学をはじめとする教義
 書は、諸宗諸寺の談所を各地に訪ね歩いた、日蓮宗の学僧によって書写され
 たものが多い。

と記し、文庫内に収蔵された典籍の豊かな内容と多様さは学僧らの仏教
 研鑽の証であるとしている。そして仏教界全体を見渡した典籍の蒐集意図
 が、見事に実を結んでいることは身延山における日蓮教学の体系化と展開
 が実現されていた証左であり、ここに収められた豊かな典籍があってこそ実
 現を見ることができた¹⁹⁾のだと評価している。

19) 中尾堯2005 「『身延文庫典籍目録 下』の刊行にあたって」『身延文庫典籍目録 下』参照

6. 身延文庫以外に所蔵される身延文庫典籍とその他の貴重本

最後に身延文庫所蔵典籍とそれ以外に所蔵される身延文庫典籍についてである。これについては身延山大学准教授 金 炳坤^{きむ びんこん}氏²⁰⁾がその論文「身延山の海東仏教関連資料について」²⁰⁾にて詳細に述べられている。ここで金氏の論考を基として身延文庫以外に所蔵される身延文庫典籍と身延山大学図書館所蔵身延文庫典籍について考察したい。

身延文庫所蔵の諸典籍の多くは、先にも示した『身延文庫典籍目録』全三巻に収録されている。ただし、ここに載せられているものが全体ではなく、身延文庫典籍の一部は身延山大学図書館に所蔵されている。さらに身延文庫内にある典籍端本類（主に板本端本や近代文書）についても、実は『身延文庫典籍目録』には収録されていない。身延山大学図書館に収録される身延文庫典籍は先の目録とは別に「身延山大学図書館所蔵古典籍目録」が作成されており、本目録について先述の金氏が「身延山の海東佛教関連資料について」²¹⁾にて、図書館に所蔵される仏典籍について「登録件数を号すると、その総数は4406点である」とする。身延文庫所蔵の典籍は先にも述べた日脱の制規があるにも関わらず、なぜ出庫され身延山大学図書館に所蔵（委託保管）されたのであろうか。金氏は同稿において、身延山大学図書館に身延文庫典籍が所蔵された経緯は記録が残っていないため、判然としないが関係者に聞き取り調査を行った結果、今から40年程前の東西両蔵新築に際して一時、身延山短期大学図書館（現在の身延山

20) 金 炳坤2016 「身延山の海東仏教関連資料について」『印度學佛教學研究』65(1): p26-32

21) 金氏は本目録より海東仏教諸師章疏について論究されており、本論文はこれを紹介することを目的としている。

大学本館)に移動され一時保管されることとなったとし、1976年の完成を待って、再び宝蔵に戻されることになったのであるが、収蔵スペースの問題からその段階で一部(主に刊本類)がそのまま残ることとなり、1988年に図書館が改築されたことより本館から現図書館にて引き続き保管されることとなったと推察される²²⁾としている。今回、本論執筆にあたり論者も聞き取り調査を行ったところ、金氏が記した経緯の他に、実はそれ(1976年)以前より一部の身延文庫典籍が身延山大学の前々身である「祖山学院」時代に移動されていたということ突き止めた。この時に移動された典籍は金氏が指摘される板本(刊本)類で、この移動理由についてはこの板本類はもともと身延西谷檀林関係典籍でもあったため、西谷檀林が祖山学院の淵源であるという関係から蔵書移動がなされたというものであった。そして現在もそれが引き続き身延山大学図書館にて保管されるに至っているという。金氏も指摘しているが、上記の通り複雑な事情により「身延山大学図書館所蔵古典籍目録」は外部に公開されることはなかった。このような文庫典籍以外にも貴重典籍類は実は身延山大学図書館には複数存在し、目録化されている。次にこの典籍類の目録について少しく紹介したい。

まず『身延山大学図書館所蔵和漢古典籍目録(坂本文庫目録)』が挙げられる。これは坂本^{さかもと}日深^{にちじん}(幸男^{ゆきお})氏旧蔵典籍類の目録で、その内容は一部写本があるものの多くは板本である。次に挙げるのが『身延山大学図書館所蔵和漢古典籍目録(平原文庫目録)』である。平原文庫は先の坂本文庫同様にその多くは板本であるが、仏教書が中心であった坂本文庫に対して平原文庫は仏教書以外にも医書・史書・外典も数多く収録されている。

その他に個人旧蔵典籍目録として三重県妙長寺旧蔵典籍の目録である『身延山大学図書館所蔵和漢古典籍目録(妙長寺文庫目録)』が挙げられ

22) 金 炳坤2016 「身延山の海東仏教関連資料について」『印度學佛教學研究』65(1): p26-27

る。これは日蓮系学書のみならず諸宗の教学書も収録されている。次に日蓮・天台系典籍がほとんどではあるが華嚴関係も少しく収録される、松木本興旧蔵典籍『身延山大学図書館所蔵和漢古典籍目録(松木文庫目録)』。また仏教書は一部でその多くは和書である池原要俊旧蔵典籍『身延山大学図書館所蔵和漢古典籍目録(池原文庫目録)』。松木文庫と同様に日蓮・天台系典籍がほとんどではあるが三論・唯識関係も少しく見られる中谷良英旧蔵典籍『身延山大学図書館所蔵和漢古典籍目録(中谷文庫目録)』などが現在身延山大学図書館に所蔵されている典籍類の目録である。

7. むすびにかえて

以上、「身延山と東アジア仏教の至宝」と題して特に身延山久遠寺身延文庫について、その沿革やその典籍蒐集を中心に考察した。身延文庫に所蔵される典籍は幻の史料群と言っても過言ではなかった。ここに敢えて「なかった」と過去形で記したのは『身延文庫典籍目録』が公刊されたことより、その典籍は幻ではなくなり、その貴重性について一躍脚光を浴びる事となったからである。しかし本論からもわかるように『身延文庫典籍目録』などに記載される典籍が身延文庫所蔵典籍の全てではない。また『身延文庫典籍目録』刊行に際して諸般の事情によりその内容を大幅に縮小したため、本書の収録項目は必要最低限の項目に限定されている。これらのこと想うと今後も身延文庫所蔵典籍について継続調査の必要性を感じるのである。そしてその調査は必ず日本仏教のみならず、東アジア仏教に大きく貢献するものであると強調して、本論のむすびにかえたい。

약호 및 참고문헌

- 定遺：立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』、身延山久遠寺、2000
- 冠賢一1983『近世日蓮宗出版史研究』、平楽寺書店
- 冠賢一2003「身延文庫調査報告」『身延文庫典籍目録 上』、身延山久遠寺
- 木村中一·金天鶴2013『身延山資料叢書 第三卷 目録集三 日朝筆『章疏目録』』、身延山大学東洋文化研究所
- 木村中一·金炳坤2014『身延山資料叢書 第四卷 目録集四 日鏡筆『章疏目録』』、身延山大学東洋文化研究所
- 木村中一2016「近世日蓮教団の檀林における修学内容についての一考察」『印度學佛教學研究』65(2) p187-193
- 中尾堯2005「『身延文庫典籍目録 下』の刊行にあたって」『身延文庫典籍目録 下』、身延山久遠寺
- 藤井教詮 1975『飯高檀林史料 檀林録上』
- 室住一妙1941『身延文庫略沿革』、身延文庫
- 金 炳坤2016「身延山の海東仏教関連資料について」『印度學佛教學研究』65(1):p26-32

Abstract

The Great Treasures of East Asian Buddhism and Minobusan

Chuichi Kimura

Minobusan University

On Mount Minobu is located Kuonji Temple, and from ancient times this area was known to believers as a sacred place, referred to as “The Mountain of the Founder of the Nichiren School.”

The Minobu Archive is under the jurisdiction of Kuonji Temple, and in this collection are many Buddhist scriptures, apocrypha and other treasures of Buddhist literature. These are widely used not only by researchers of the Nichiren School of Buddhism, but also by many researchers of East Asian Buddhism in general. The works are introduced in the three-volume “Index of Writing in the Minobu Archive” and the “Index of Art and Writing in the Minobu Archive.” However, in the present situation researchers in far places can only find the tiny amount of information contained in these

indexes that is open to the public, and must actually come to Mount Minobu if they wish to use the works in the Minobu Archive for their research.

In this paper, entitled *The Great Treasures of East Asian Buddhism and Minobusan*, I will first simply discuss the life of Saint Nichiren, the founder of Nichiren Buddhism, as it is deeply related to the first period of the chronicles of the Minobu Archive. Next I will discuss the theory behind the collection of writing in the Minobu Archive, and the purpose and methods of collection. Afterwards I will divide the history of the Minobu Archive into 6 periods, discussing the state of the collection in each period. Following this I will discuss the modern investigations of the Minobu Archive that led to the creation of the “Index of Writing in the Minobu Archive,” and finally I will write about the works that are preserved separately from the Minobu Archive, discussing the state of preservation and the value of the other important writing.

Through the consideration explained above, I sincerely hope that this paper can lead to the development of East Asian Buddhist research and can provide a chance for new discovery.

Keywords : Mount Minobu, Kuonji Temple, the Nichiren School, the Minobu Archive, East Asian Buddhism